梵文『無量寿経』における
諸仏と衆生の呼応（中）
—特に称名と聞名に関して—

畝　部　俊　英

目　次

序　　論……2
本　　論……9
Ⅰ．梵文『無量寿経』における称名と聞名の意味・用法……9
（甲）称　　名……9
(a) シナ訳『無量寿経』における称及びその類語……9
(b) シナ訳『無量寿経』における称及びその類語と梵文との対照……10
(c) 梵文『無量寿経』における称名……15
(d) 梵文『無量寿経』における pari-√kīrt（称讃する）の意味・用法…17
(1) nāmadheya（名号）を目的語としない pari-√kīrt について…17
(2) nāmadheya を目的語とする pari-√kīrt について……20
（以上前号）
（乙）聞　　名……30
(a) シナ訳『無量寿経』における聞名……30
(b) シナ訳『無量寿経』における聞名と梵文との対照……31
(c) 梵文『無量寿経』における聞名……41
(d) 梵文『無量寿経』における √śru（聞く）の意味・用法……43
(1) nāmadheya を目的語としない √śru について……43
(2) nāmadheya を目的語とする √śru について……53
（以下次号）
Ⅱ．梵文『無量寿経』における称名と聞名の開示するもの……
結　　論……

本稿は『同朋仏教』第５号に発表した「梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）―特に称名と聞名に関して―」の続きである。前号においては梵文『無量寿経』における称名の意味・用法を取り上げ，称名は聞名との対応において，初めて明瞭なる姿をあらわしてくるように思われる旨を述べておいたので，本号においては梵文『無量寿経』における聞名の意味・用法を取り上げて，考察してみよう。

（乙） 聞　　名

（a） シナ訳『無量寿経』における聞名

称名の場合と同様に，先づシナ訳『無量寿経』① から，「名号を聞く」意があらわされていると思われる語句を取り出してみる。

1）	聞有不善名（『真宗聖教全書，一，』〈以下略号『真聖全』〉		9頁）
2）	聞我名号	（同上	10頁）
3）	聞我名字	（同上	11頁）
4）	聞我名字	（同上	12頁）
5）	聞我名字	（同上	12頁）
6）	聞我名字	（同上	12頁）
7）	聞我名字	（同上	12頁）
8）	聞我名字	（同上	13頁）
9）	聞我名字	（同上	13頁）
10）	聞我名字	（同上	13頁）
11）	聞我名字	（同上	13頁）
12）	聞我名字	（同上	13頁）
13）	聞我名字	（同上	13頁）
14）	名声超十方　究竟靡所聞	（同上	14頁）

15）　聞其名号　（同上　24頁）
16）　聞名欲往生　（同上　26頁）
17）　得聞彼仏名号　（同上　46頁）

以上のほぼ17の個所に見出される。

（b）　シナ訳『無量寿経』における聞名と梵文との対照

これら17の「名号を聞く」意をあらわす語句のうち，5）を除く，16の語句が，梵文『無量寿経』に相応個所を持っているが，以下，これらの一つ一つについて，順次シナ訳と梵文とを対照してみよう。

1）設我得仏，国中人天，乃至聞有不善名者，不取正覚。
（『真聖全』9頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya tasmin buddhakṣetre sattvānām akuśalasya nāmadheyam api bhaven, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.
(Sukh. p. 13, *ll.* 14—16)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても②，もしもかの仏国土における衆生たちに不善の名（nāmadheya）③すらもあるようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

2）設我得仏，十方衆生，聞我名号，係念我国植諸徳本，至心廻向欲生我国，不果遂者，不取正覚。
（『真聖全』10頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasyāprameyāsaṁkhyeyeṣu

buddhakṣetreṣu ye sattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā, tatra buddhakṣetre cittaṁ preṣayeyur, upapattaye kuśalamūlāni ca pariṇāmayeyus, te ca tatra buddhakṣetre nopapadyeran, antaśo daśabhiś cittotpādaparivartaiḥ, sthāpayitvānantaryakāriṇaḥ saddharmapratikṣepāvaraṇāvṛtāṁś ca sattvān, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

(Sukh. p. 14, *ll.* 2—8)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしも無量・無数の仏国土における衆生たちがわたくしの名号を聞いて（sattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā），かしこの仏国土に対して心をかけ，〔そこに〕生まれるためにもろもろの善根を廻向するとして，かれらが，無間業をつくった者たちと正法を誹謗するという障碍によって覆われた衆生たちとを除いて，よしや十念〔というわずかな時間，十たびの心〕④を発起・相続することだけによってでも，かしこの仏国土に生まれないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

3）設我得仏，十方無量不可思議諸仏世界衆生之類，聞我名字，不得菩薩無生法忍，諸深総持者，不取正覚。

（『真聖全』11頁—12頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, samantāc cāprameyāsaṁkhyeyācintyātulyāparimāṇeṣu buddhakṣetreṣu bodhisattvā mama nāmadheyaṁ* śrutvā, tac-chravaṇasahagatena kuśalamūlena jātivyativṛttāḥ** santo, na dhāraṇīpratilabdhā bhaveyur, yāvad bodhimaṇḍaparyantam iti, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

** 藤田補正表による。

(Sukh. p. 18, *ll.* 3—8)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもあまねく無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏国土における菩薩たちがわたくしの名

号を聞いて（bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā），それを聞くことにともなう善根によって，生を脱して，菩提道場に到達するまで，陀羅尼を得た者たちとならないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

4）設我得仏，十方無量不可思議諸仏世界，其有女人，聞我名字，歓喜信楽，発菩提心，厭悪女身，寿終之後，復為女像者，不取正覚。
（『真聖全』12頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, samantād aprameyāsaṁkhyeyācintyātulyāparimāṇeṣu buddhakṣetreṣu yāḥ striyo mama nāmadheyaṁ śrutvā, prasādaṁ saṁjanayeyur, bodhicittaṁ cotpādayeyuḥ, strībhāvaṁ ca vijugupseran*, jātivyativṛttāḥ samānāḥ saced dvitīyaṁ strībhāvaṁ pratilabheran, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 18, *ll.* 9—15)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもあまねく無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏国土における女人たちがわたくしの名号を聞いて（striyo mama nāmadheyaṁ śrutvā），浄信を生じ，菩提心を発起し，かつ女であることを厭うたとして，生を脱して，もし再び女であることを得るようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

5）設我得仏，十方無量不可思議諸仏世界諸菩薩衆，聞我名字，寿終之後，常修梵行，至成仏道。若不爾者，不取正覚。
（『真聖全』12頁）

〔梵文相応個所なし。〕

6）設我得仏，十方無量不可思議諸仏世界諸天人民，聞我名字，五体投地，稽首作礼，歓喜信楽，修菩薩行，諸天世人，莫不致敬。若不爾

者，不取正覚。

（『真聖全』12頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, samantād daśasu dikṣv aprameyāsaṁkhyeyācintyātulyāparimāṇeṣu buddhakṣetreṣu ye bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā, praṇipatya pañcamaṇḍala-namaskāreṇa vandiṣyante, te bodhisattvacaryāṁ caranto, na sadevakena lokena* satkṛtyeran, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 18, *ll.* 16—21)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもあまねく十方の無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏国土における菩薩たちがわたくしの名号を聞き（bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā），五体〔投地〕の礼をもって稽首作礼し，菩薩の行を修しているのに，神々を含む世間によって恭敬されないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

7）設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，至于得仏，諸根闕陋不具足者，不取正覚。

（『真聖全』12頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, taṁ mama nāmadheyaṁ śrutvānyabuddhakṣetropapannā bodhisattvā indriyabalavaikalyaṁ* nirgaccheyur, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 19, *ll.* 14—17)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても．もしも他の仏国土に生まれた菩薩たちがかのわたくしの名号を聞いて（taṁ mama nāmadheyaṁ śrutvā …… bodhisattvā ……），〔菩提道場に到達するまで〕，諸感官の力の欠陥におちいるようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

8）設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，皆悉逮得清浄解脱三昧。住是三昧，一発意頃，供養無量不可思議諸仏世尊，而不失定意。若不爾者，不取正覚。

（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tad-anyabuddhakṣetrasthā bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā, sahaśravaṇān na suvibhaktavatīṁ nāma samādhiṁ pratilabheran, yatra samādhau sthitvā bodhisattvā ekakṣaṇavyatihāreṇāprameyāsaṁkhyeyācintyātulyāparimāṇān buddhān bhagavataḥ paśyanti, sa caiṣāṁ samādhir antarā vipraṇaśyen*, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 19, *ll.* 18—24)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもその他の仏国土に住する菩薩たちがわたくしの名号を聞いて（bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā），聞くと同時に，＜スヴィバクタヴァティー＞と名づける三昧―その三昧の中に住して，菩薩たちは一刹那の経過の間に，無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏世尊を見るのであるが―を得ないようであるならば，またかれら〔菩薩たち〕のその三昧が中途で消失してしまうようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

9）設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，寿終之後，生尊貴家。若不爾者，不取正覚。

（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, mama nāmadheyaṁ śrutvā, tac-chravaṇasahagatena kuśalamūlena sattvā nābhijātakulopapattiṁ pratilabheran, yāvad bodhimaṇḍaparyantaṁ, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

(Sukh. p. 20, *ll.* 1—5)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，衆生たちがわたくしの名号を聞いて（mama nāmadheyaṁ śrutvā, …… sattvā……），それを聞くことにともなう善根によって，菩提道場に到達するまで，高貴な家に生まれることを得ないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

10) 設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，歓喜踊躍，修菩薩行，具足徳本。若不爾者，不取正覚。
（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tad-anyeṣu buddhakṣetreṣu ye sattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā, tac-chravaṇasahagatena kuśalamūlena yāvad bodhiparyantaṁ na sarve bodhisattvacaryā*-prītiprāmodyakuśalamūlasamavadhānagatā bhaveyur, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 20, *ll.* 6—11)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもその他の諸仏国土における衆生たちがわたくしの名号を聞いて（sattvā mama nāmadheyaṁ śrutvā），それを聞くことにともなう善根によって，菩提に到達するまで，すべての者たちが菩薩の行を喜悦し歓喜する善根に会うことにならないようであるならば，その間は，わたくしは，無上なる正等覚をさとりません。〕

11) 設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，皆悉逮得普等三昧。住是三昧，至于成仏，常見無量不可思議一切諸仏。若不爾者，不取正覚。
（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, sahanāmadheyaśravaṇāt tad-anyeṣu lokadhātuṣu bodhisattvā na samantānugataṁ nāma samādhiṁ pratilabheran, yatra sthitvā bodhisattvā ekakṣaṇavyatihāreṇāprameyāsaṁkhyeyācintyāparimāṇān buddhān bhagavataḥ

satkurvanti, sa caiṣāṁ samādhir antarā* vipraṇaśyed**, yāvad bodhimaṇḍaparyantaṁ, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

** 藤田補正表による。

(Sukh. p. 20, *ll.* 12—18)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもその他の諸世界における菩薩たちが〔わたくしの〕名号を聞くと同時に（sahanāmadheyaśravaṇāt …… bodhisattvā ……），＜サマンターヌガタ＞と名づける三昧—その中に住して，菩薩たちは，一刹那の経過の間に，無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏世尊を恭敬するのであるが一を得ないようであるならば，またかれら〔菩薩たち〕のその三昧が，菩提道場に到達するまで，中途で消失してしまうようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

12）設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，不即得至不退転者，不取正覚。

（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tatra buddhakṣetre tadanyeṣu buddhakṣetreṣu ye bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śṛṇuyus*, te sahanāmadheyaśravaṇān nāvaivarttikā bhaveyur anuttarāyāḥ samyaksaṁbodher, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 21, *ll.* 3—7)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもかしこの仏国土とその他の諸仏国土において，わたくしの名号を聞くであろう菩薩たちが（bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śṛṇuyus, ……），名号を聞くと同時に，無上なる正等覚から退転しない者たちとならないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

13）設我得仏，他方国土諸菩薩衆，聞我名字，不即得至第一・第二・第三法忍，於諸仏法，不能即得不退転者，不取正覚。
（『真聖全』13頁）

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tatra buddhakṣetre ye bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śṛṇuyus, te sahanāmadheyaśravaṇān na prathamadvitīyatṛtīyāḥ kṣāntīḥ pratilabheran, nāvaivarttikā bhaveyur* buddhadharmebhyo, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim** abhisaṁbudhyeyam.

* avaivarttiko bhaved を訂正。

** 藤田補正表による。

(Sukh. p. 21, *ll.* 8—12)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもかしこの仏国土において，わたくしの名号を聞くであろう菩薩たちが（bodhisattvā mama nāmadheyaṁ śṛṇuyus, …… ），名号を聞くと同時に，第一・第二・第三の〔法〕忍を得ないようであるならば，仏法から退転しない者たちとならないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

14）我至成仏道
名声超十方
究竟靡所聞
誓不成正覚
（『真聖全』14頁）

saci mi upagatasya bodhimaṇḍaṁ,
daśadiśi na vraji* nāmadheyu kṣipraṁ
pṛthu bahava anantabuddhakṣetrāṁ,
ma ahu siyā balaprāptu lokanātha.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 21, *l.* 24—p. 22, *l.* 2)

〔たといわたくしが菩提道場に到達したとしても，もしも，

〔わたくしの〕名号が（nāmadheyu）速やかに十方の，
広大にして多くの無辺の諸仏国土に至らないようであるならば，
わたくしは，〔十〕力を得た世間の主とはならないであろう。〕

15） 諸有衆生，聞其名号，信心歓喜，乃至一念。至心廻向。願生彼国，即得往生，住不退転。
（『真聖全』24頁）

ye kecit sattvās tasya bhagavato* 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti, śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy adhyāśayena prasādasahagataṁ cittam** utpādayanti, sarve te 'vaivarttikatāyāṁ saṁtiṣṭhante 'nuttarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ.

* 藤田補正表による。
** 藤田補正表による。
(Sukh. p. 42, *ll.* 4—8)

〔およそいかなる衆生たちであっても，かの世尊アミターバ如来の名号を聞き(sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti)，聞きおわって（śrutvā），たとえ一念〔というわずかな時間，一たびの心〕の発起でも，深い志向によって，浄信にともなわれた心を発起するならば，かれらすべては，無上なる正等覚より退転しない状態に安住する。〕

16） 必於無量尊
受記成等覚
其仏本願力
聞名欲往生
（『真聖全』26頁）

Amitāyu buddhas tada vyākaroti:
mama hy ayaṁ praṇidhir abhūṣi pūrva.
kathaṁ pi sattvāḥ śruṇiyāna nāmaṁ,
vrajeyu kṣetraṁ mama nityam eva.
(Sukh. p. 46, *ll.* 18—21)

〔そのとき，アミターユ〔ス〕（無量寿）仏は授記する。
これは実にわたくしの以前の誓願であった。
いかにしたら，衆生たちは，〔わたくしの〕名〔号〕を聞いて（sattvāḥ śruṇiyāna nāmaṁ），常にわたくしの国土に至ることができるであろうか〔ということが〕。〕

17）仏語弥勒。其有得聞彼仏名号，歓喜踊躍，乃至一念。当知，此人為得大利。則是具足無上功徳。
（『真聖全』46頁）

paśyājita kiyat sulabdhalābhās te sattvā ye 'mitābhasya tathāgatasyārhataḥ samyaksaṁbuddhasya nāmadheyaṁ śroṣyanti. nāpi te sattvā hīnādhimuktikā bhaviṣyanti, ye 'ntaśa ekacittaprasādam api tasmin tathāgate pratilapsyante, 'smiṁś ca dharmaparyāye.
(Sukh. p. 62, *ll.* 18—22)

〔アジタよ，見よ，アミターバ如来・応供・正等覚者の名号を聞くであろう衆生たちが（sattvā…… 'mitābhasya tathāgatasyārhataḥ samyaksaṁbuddhasya nāmadheyaṁ śroṣyanti）いかにすばらしい利得を得た者たちであるかを。かの如来に対し，またこの法門に対し，たとい一念〔というわずかな時間，一たびの心〕⑥ の澄浄でも得るであろう衆生たちは，劣った信解をもつ者たちとはならないであろう。〕

以上の17の個所のシナ訳と梵文とを対照してみて，シナ訳の聞名に相応する梵文は，nāmadheyaṁ √śru であることがわかる。

従って，これらのうち，nāmadheyaṁ √śru の含まれている梵文が見出されるのは，**2**），**3**），**4**），**6**），**7**），**8**），**9**），**10**），**11**），**12**），**13**），**15**），**16**），**17**）の14例である。

（c） 梵文『無量寿経』における聞名

称名の場合と同様に，梵文『無量寿経』における聞名の語・意味・用法を知るために，最も単純に，シナ訳『無量寿経』から，「名号を聞く」意があらわされている語句を取り出し，更にそれと相応する梵文によって，聞名に相当する梵文は nāmadheyaṁ √śru であることを，上で確めた。

そこで抜き出しておいた nāmadheyaṁ √śru を含む14の梵文とシナ訳『無量寿経』には相応個所が見出されない nāmadheyaṁ √śru を含む梵文2つ⑧の合計16例から，主語，目的語の部分，動詞または動詞に相当する語のある部分を取り出し，共通する語または語句の頻度数を調べてみると，

＜主　　語＞

sattvāḥ（衆生たちは）……8回
bodhisattvāḥ（菩薩たちは）……7回
striyaḥ（女人たちは）……1回

＜目的語の部分＞

〔注　▭を付したるものは，▭の内を目的語と見なす〕

mama nāmadheyam……11回
saha nāmadheya śravaṇāt ……1回
tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam…1回
nāmadheyam ……1回
nāmam(ママ) ……1回
Amitābhasya tathāgatasyārhataḥ
samyaksaṁbuddhasya nāmadheyam ……1回

＜動詞＞または＜動詞に相当する語＞

śrutvā
śravaṇāt
śṛṇuyus
śṛṇvanti
śrutam
śroṣyanti
} √śru ……16回

という結果になる。

この結果は，要約的に，(**b**)項の**15**）（p. 39, *ll.* 7—8）の梵文によって，代表させることができるであろう。

すなわち，

sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti.

〔衆生たちは，かの世尊アミターバ（無量光）如来の名号を聞く。〕

という個所である。

梵文『無量寿経』における聞名は，上のように表わすことができると思う。

これは既に指摘した如く（前号23頁），梵文『無量寿経』における称名として，再構成してみたところの，

buddhās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ parikīrtayante.

〔諸仏は，かの世尊アミターバ如来の名号を称讃する。〕

とぴったり対応するものである。

しかもここで最も注目すべき点は，nāmadheyaṁ pari-√kīrt（名号を称讃する）の主語が，終始，諸仏（世尊たち，如来たち，釈尊）である如く，nāmadheyaṁ √śru（名号を聞く）の主語は，梵文『無量寿経』においては，首尾一貫して，衆生たち（sattvāḥ），菩薩たち（bodhisattvāḥ）女人たち（striyaḥ）であるということである。

何故，このように表わされているのであろうか。この問題を解くためにもう少し梵文『無量寿経』における √śru（聞く）の意味・用法を調べてみよう。

（d） 梵文『無量寿経』における √śru（聞く）の意味・用法

（1） nāmadheya を目的語としない √śru について

1） evaṁ mayā śrutam ekasmin samaye.
(Sukh. p. 1, *l.* 12)

〔このようにわたくしによってあるとき聞かれております（śrutam）。〕

これは，『無量寿経』の冒頭の個所であり，ほとんどの仏教経典が，この形式ではじまっているのであるが，ここに，仏教経典の性格が端的に示されていると思う。

「わたくしによって聞かれている」ものが，仏教経典であり，「聞かれている」ということは「説かれる」ということがあって，はじめて成り立つ。「聞」は「説」に応ずるものである。それは莫然と聞かれていることでなく「わたくし」という主体をかけて，時の中で聞かれ，単に「聞かれた」という過去ではなく，今も「聞かれた」ことがありありと耳の底に留まっている，「聞かれている」（śrutam）のである。近代の諸学者が，「あるとき」（ekasmin samaye）を，この個所にかけて読んだ⑦ことにも，大きな意味があるように思われるので，今はそれに従う。

ともあれ，仏教経典の成立は，仏陀の正覚がことばとなって説かれ，人々によって聞かれたことにはじまるのである。

2) tena hy Ānanda śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru*. bhāṣiṣye 'haṁ te. evaṁ Bhagavann ity āyuṣmān Ānando Bhagavataḥ pratyaśrauṣīt.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 5, *ll.* 4—6)

〔それでは，アーナンダよ，よく聞きなさい（śṛṇu）。よく思念しなさい。わたくしはあなたに説きましょう。
「世尊よ，かしこまりました。」と尊者アーナンダは世尊に答えた。〕

これも，仏陀が説法をはじめられるときの慣用句として，原始仏教聖典といわれているものにも見られるものである⑧が，ここでは，まず「よく聞け，よく思念せよ。」と呼びかけられ，「よく聞く，よく思念する」準備の整っところで「説こう。」といわれているのである。よく説かれることが成り立つには，よく聞く，よく思念する準備が整う必要があるという意味では，「聞」の準備は「説」に先立つものでもある。ここに仏教においては，いかに聞が大切であるかを見ることができるであろう。しかも「よく聞く」ことと同時に「よく思念する」ことがすすめられているのは，聞・思・修への展開を持つ「聞」であるからであろう。

3) api tu Bhagavān eva bhāṣatv anyeṣāṁ tathāgatānāṁ buddhakṣetraguṇavyūhālaṁkārasaṁpadaṁ, yāṁ śrutvā vayaṁ sarvākārāṁ paripūrayiṣyāma iti.

(Sukh. p. 9, *ll.* 7—9)

〔しかし世尊こそ他の如来たちの仏国土の功徳の荘厳・厳飾の成就を説いて下さい。それを聞いて（śrutvā），われわれは〔仏国土の〕一切の様相を完成するでありましょう。〕

「世尊こそが」(Bhagavān eva) 説くことができるのであるから，どうか「説いて下さい。」(bhāṣatu) という願いのところに世尊の説法があるのである。従って，「聞」はまた「説いて下さい。」という願心がかたちをとってあらわれたすがたであり，「それを聞いて，われわれは〔仏国土の〕一切の様相を完成するでありましょう。」というところに，聞くことが単に聞くことにとどまらずして，〔仏国土の〕一切の様相を (ākārām) 完成することへ向っての出発を意味するのである。願心はかたちとなって，聞，思，修へと展開するものであるということになるであろう。

また，ここに「説いて下さい。」という bhāṣatu なる語は，既に述べた（前号，pp. 17-18）parikīrtayatu（称讃して下さい）の言いかえであるように思われる。とするならば，pari-√kīrt（称讃する）ということは「説く」(√bhāṣ) という意味をもつことが，ここでも確められる。このことが認められるならば，「聞く」ことは「称讃する」ことに応ずることである。勿論，この個所でも，「聞く」のは「われわれ」—ここでは，アーナンダであるが—，衆生たちであり，「説く＝称讃する」のは，世尊であるということはかわらない。

4) tena hi bhikṣo bhāṣasva. anumodate tathāgataḥ. ayaṁ kālo bhikṣo, pramodaya parṣadaṁ, harṣaṁ janaya, siṁhanādaṁ nada, yaṁ śrutvā bodhisattvā mahāsattvā etarhy anāgate cādhvany evaṁrūpāṇi buddhakṣetrasaṁpattipraṇidhānāni parigṛhīṣyanti.

athānanda sa Dharmākaro bhikṣus tasyāṁ velāyāṁ taṁ bhagavantam etad avocat: tena hi śṛṇotu me bhagavān, ye mama praṇidhānaviśeṣāḥ, yathā me 'nuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbuddhasyā*cintyaguṇālaṁkāravyūhasamanvāgataṁ tad buddhakṣetraṁ bhaviṣyati:

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 10, *ll.* 10—19)

〔それでは，比丘よ，説きなさい。如来は〔それを〕喜ぶ。比丘よ，これ時である。会衆を悦ばせなさい。歓呼をあげさせなさい。獅子吼をしなさ

い。それを聞いて（śrutvā），菩薩・大士たちは，現在と未来世において，このような仏国土の成就の諸誓願を摂取するであろう。

そこでアーナンダよ，かのダルマーカラ比丘は，そのとき，かの世尊に対し次のように言った。

それでは，世尊はわたくしの〔ことばを〕聞いて下さい（śṛṇotu）。それは，わたくしが無上なる正等覚をさとったとき，かの仏国土が不可思議な功徳の厳飾・荘厳をもつものとなるであろうという，わたくしの特別な諸誓願であります。〕

これは，ローケーシュヴァラ・ラージャ（世自在王）如来の前にて，ダルマーカラ（法蔵）比丘が諸誓願を述べるにいたるところであるが，ここでは，仏の意向を受けて，はじめて比丘自身の諸誓願を説くことが可能なこと，そしてそれら諸誓願を説くことによって，菩薩・大士が聞き，それら諸誓願を摂取することが可能であることを，あらわしている。

5) sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tatra buddhakṣetre ye bodhisattvāḥ pratyājātā bhaveyus, te yathārūpāṁ dharmadeśanām ākāṁkṣeyuḥ, śrotuṁ tathārūpāṁ* sahacittotpādān na śṛṇuyur, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 20, *l.* 19—p. 21, *l.* 2)

〔世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしもかしこの仏国土に生まれるであろう菩薩たちが，どのような説法を聞くこと（śrotuṁ）を欲しようと，〔聞きたいという〕心を発起すると同時に，〔その聞きたいという心の〕そのとうりに聞けないようであるならば（na śṛṇuyur），その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

一四九

梵文『無量寿経』において，nāmadheya（名号）を目的語としない√śru（聞く）の一般的な目的語は，どのようなものであるかといえば，この個所の如く「説法（dharmadeśanā）」であり，「正法（saddharma）」（p. 12, *l.* 5）であり，「法（dharma）」（p. 51, *l.* 2）であり，「法門

(dharmaparyāya)」(p. 62, *l.* 24) であって，他の仏教経典と同じようなものである。またこの場合の √śru という動詞の主語は，やはり「衆生たち (sattvāḥ)」(p. 12, *l.* 3など)，「菩薩たち (bodhisattvāḥ)」(p. 20, *l.* 20 など) であって，既に調べた如く，nāmadheya を目的語とする √śru の場合の主語と同様である。従って nāmadheya を目的語とする場合には，説法，正法，法，法門のかわりに nāmadheya が √śru の目的語としてあることになる。このことは，説法とか正法とか法ということで意味せられるもののうちもっとも端的に具体化せられたものこそ，『無量寿経』においては nāmadheya（名号）であることを，暗黙のうちに示していることになるのであろう。

6) tasmin khalu punar Ānanda buddhakṣetre ye bodhisattvāḥ pratyājātāḥ, sarve te 'virahitā buddhadarśanena dharmaśravaṇenāvinipātadharmāṇo, yāvad bodhiparyantaṁ.
(Sukh. p. 49, *ll.* 17—19)

〔また実に，アーナンダよ，かの仏国土に生まれた菩薩たちは，みんな，仏を見ること，法を聞くこと (śravaṇa) と離れないものたちであり，菩提に到達するまで，不堕法を得たるものたちである。〕

ここでは，「仏を見ること」と「法を聞くこと」が並べ，述べられているが，他の個所でも「仏を見ること，菩薩を見ること，正法を聞くこと」(p. 58, *ll.* 16-17) などが並べ説かれている。「仏を見る」ことと「法を聞くこと」は「見る」と「聞く」の違いはあるが，結局，同じ意味をもつのであろう。

一四八

7) ye* śrutvā codāraṁ prītiprāmodyaṁ pratilapsyanta, udgrahīṣyanti, dhārayiṣyanti, vācayiṣyanti, paryavāpsyanti, parebhyaś ca vistareṇa saṁprakāśayiṣyanti, bhāvanābhiratāś ca bhaviṣyanty, antaśo likhitvā pūjayiṣyanti, bahu ca te puṇyaṁ prasaviṣy-

anti, yasya na sukarā saṁkhyā kartum.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 63, *l.* 22—p. 64, *l.* 5)

〔そして，かれら〔衆生たち〕は，〔これらの法門を〕聞いて（śrutvā），広大なる喜悦・歓喜を得，領受し，受持し，読誦し，完全に了解し，他の人々に詳しく説き明かし，修習を楽しみとし，乃至，書写して供養するであろう。そして，かれらは多くの福徳を生ずるであろうが，その〔福徳の〕数は数えることが容易でない〔であろう〕。〕

ここでは，この『無量寿経』に説かれた「法門を深い志向をもって」(dharmaparyāyasyādhyāśayena, p. 63, *ll.* 5-6) 聞いたならば (śrutvā)，どうなるかが述べられている。ここには，この法門を聞いた人たちの実際の体験があらわされているように思われる⑨。

先づ「広大なる喜悦・歓喜を得るであろう」(udāraṁ prītiprāmodyaṁ pratilapsyante) といわれている。

法門が聞かれた時には，先づもって，他の何ものによっても得ることのできない（広大なる）喜悦・歓喜が獲得される。今まで我執・我所執の牢獄—自己中心性—の中に閉じ込められていた者が，初めて解放せられ，自由の天地の真只中で，光り輝く太陽を全身に受けとめている自分を見出した歓喜とでもいえるであろうか。この「喜悦・歓喜を得る」ということは nāmadheya（名号）を目的語とする √śru（聞く）の場合には，どのようになっているか，それは後の (2) 項（pp. 57—58）で取り上げることとして，それ以外のところでも，梵文『無量寿経』では，このことがたびたび述べられているので，以下，少しそれらを紹介してみよう。

śrutvā ti vācaṁ paramāṁ manoramāṁ,
udagracittā bhaviṣyanti sattvāḥ.
ye bodhisattvā bahulokadhātuṣu
Sukhāvatīṁ prasthita buddhapaśyanā,

te śrutva prītiṁ vipulāṁ janetvā,
kṣipraṁ imaṁ kṣetra vilokayeyuḥ.
(Sukh. p.46, *ll.*8—13)

〔おんみの最高に快い言葉を聞いて（śrutvā），
衆生たちは喜びの心に満たされるものたちとなるであろう。
仏にまみえようと極楽に向った
多くの世界における菩薩たちは，
〔おんみの言葉を〕聞いて（śrutva），大いなる喜悦を生じ，
（prītiṁ vipulāṁ janetvā）
速やかに，この国土を観察するであろう。〕

これは，いわゆる東方偈の前半の一部分であるが，梵文では別の個所に見出されるその後半の所にも，

dṛṣṭo yaiś ca hi saṁbuddho
lokanātha prabhaṁkaraḥ,
sa gauravaiḥ śruto dharmaḥ
prītiṁ prāpsyanti te parāṁ.
……
ya īdṛśāṁ dharma śruṇitva* śreṣṭhāṁ
labhyanti prītiṁ sugataṁ smarantaḥ,
te mitram asmākam atītam adhvani,
ye buddhabodhāya** janenti cchandam, iti.
* 藤田補正表による。
** 藤田補正表による。
(Sukh. p.64, *ll.*21—24, …… p.65, *ll.*26—29)

〔また，実に，正覚者であり，
世間の主である，光明を放つ者にまみえ，
尊敬して，かの法を聞いた者たちは（śruto），
最高の喜悦*を得るであろう（prītiṁ prāpsyanti）。
……

このようにすぐれた法を聞いて（śruṇitva），
善逝を念じつつ，喜悦*を得（labhyanti prītiṁ），
仏の覚りのために意欲を生ずる者たち，
かれらは，過去世において，われわれ〔＝わたくし〕の友であった。〕
（藤田試訳 p. 135, *ll.* 9—12, ……p. 137, *ll.* 11—15に従う。
但し＊の個所は喜びを喜悦とする。）

また次のようにも述べられている。

tad yathā; buddhaśabdaṁ, dharmaśabdaṁ, saṁghaśabdaṁ, pāramitāśabdaṁ, bhūmiśabdaṁ, balaśabdaṁ, vaiśāradyaśabdam, āveṇikabuddhadharmaśabdam, abhijñāśabdaṁ, pratisaṁvicchabdaṁ, śūnyatānimittāpraṇihitānabhisaṁskārājātānutpādābhāvanirodhaśabdaṁ, śāntapraśāntopaśāntaśabdaṁ, mahāmaitrīmahākaruṇāmahāmuditāmahopekṣāśabdam, anutpattikadharmakṣāntyabhiṣekabhūmipratilambhaśabdaṁ ca śṛṇoti. ta evaṁrūpāṁś chabdāṁś chrutvodāraprītiprāmodyaṁ pratilabhante, vivekasahagataṁ, virāgasahagataṁ, śāntasahagatāṁ, nirodhasahagataṁ, dharmasahagataṁ, bodhiparinispattikuśalamūla*sahagataṁ ca.

* 藤田補正表による。

（Sukh. p. 36, *ll.* 7—17）

〔すなわち，仏の声，法の声，僧の声，波羅蜜の声，地の声，力の声，無所畏の声，不共仏法の声，神通の声，無礙解の声，空・無相・無願・無作・無生・無起・非有・滅の声，寂静・平静・静穏の声，大慈・大悲・大喜・大捨の声，無生法忍・灌頂地の逮得の声を聞く（śṛṇoti）。かれら〔衆生たち〕は，このようなもろもろの声を聞いて（śrutvā），遠離にともなう，離貪にともなう，寂静にともなう，止滅にともなう，法にともなう，菩提を完成する善根にともなう，広大なる喜悦・歓喜を得るのである（udāra prītiprāmodyaṁ pratilabhante）。〕

一四五

ここでは，大乗仏教の基本的な教義の名目をあげ，かの仏国土では，それらが聞かれるとして，聞いて「遠離にともなう」などの出世間的な喜

悦・歓喜を得るというのである。

idam avocad Bhagavān āttamanā Ajito bodhisattvo mahāsattva* āyuṣmāṁś cānandaḥ, sā ca sarvāvatī parṣat sadevamānuṣāsura**-gandharvaś ca loko Bhagavato bhāṣitam abhyanandann iti.

* 藤田補正表による。

** 藤田補正表による。

(Sukh. p. 66, *l.* 23—p. 67, *l.* 1)

〔以上のように，世尊は説かれた。アジタ菩薩・大士，尊者アーナンダ，かの会衆全体，また，神々・人間・阿修羅・ガンダルヴァを含む世間〔の者たち〕は，歓喜し (attamanā)，世尊の説かれたことを喜んで受け入れた。(abhyanandan)。〕

(藤田試訳 p. 139, *ll.* 6—9 に従う。)

これは，梵文『無量寿経』の最後の部分であり，仏教経典によく見られる慣用的な結びの文句であるが，「このようにわたくしによってあるとき聞かれております。」で始まり，「世尊の説かれたことを喜んで受け入れた。」で終ることは，「聞」と「説」の呼応，「聞」いて歓喜を得るものが，仏説であることの表明であり，単なる形式として見落してはならないことであろう。

さて，この『無量寿経』の法門を聞いたならば，「広大なる喜悦・歓喜を得るであろう。」とのべられ，その次には，「領受し，受持し，読誦し，完全に了解するであろう。」(udgrahīṣyanti, dhārayiṣyanti, vācayiṣyanti, paryavāpsyanti) とある。聞いたことは，単に「喜悦・歓喜を得る」ことにとどまるものでなく，次の段階においては，より自身の上に受け入れられ，持たれ，深められていくのである。それが「完全に了解」されたときには，更に進んで「他の人々に詳しく説き明かし，修習を楽しみとする」段階に入るのである。この段階では，「他の人々に詳しく説き明す」ことばを持つにいたるのである。

既に述べた（前号，p. 26）如く，梵文『無量寿経』における，称名の称にあたる pari-√kīrt の意味は「ほめる，ほめて説く，具体的に一つ一つ取りあげて説く」ことであり，しかもその場合，pari-√kīrt の主語は，首尾一貫，諸仏（世尊たち，如来たち，釈尊）であって，ほめる，ほめて説くことのできることばを持つのは，諸仏のみであった。

この個所に見られる「他の人々に詳しく説き明すであろう」(parebhyaś ca vistareṇa saṁprakāśayiṣyanti) の saṁ-pra-√kāś は，pari-√kīrt と，「説く」ということでは，同じ意味を持つ（前号，p. 19 参照）とすれば，衆生が「聞く」ことに始まり，聞いて「広大なる喜悦・歓喜を得」て「他の人々に説き明す」にいたるところに，衆生の「聞」と諸仏の「説」のかかわりの根拠を見出したいのであるが，この点については，項を改めて後に取り上げるであろう。

8) śraddhā hi mūlaṁ jagatasya prāptaye,
tasmād dhi śrutvā vimatiṁ vinodayed, iti.
(Sukh. p. 41, *ll.* 22—23)

〔信（śraddhā）は，実に，〔極楽〕世界に達するための根本である。
それ故に，実に，聞きおわって（śrutvā）疑念を除くべきである。〕
（藤田試訳　p. 93, *ll.* 1—2 に従う。）

この偈文は，すべてのシナ訳諸本に見当らないものであるが，「聞きおわって」(śrutvā) 疑念が除かれるのが信であり，しかもこの信こそ，〔極楽〕世界に達するための根本であるとする。

このような聞は，従って，また次のように強くすすめられている。

9) tasmāt tarhy Ajita; ārocayāmi vaḥ, prativedayāmi vaḥ, sadevakasya lokasya purato 'sya dharmaparyāyasya śravaṇāya*, trisāhasramahāsāhasram api lokadhātum agniparipūrṇām avagāh-

yātikramyaikacittotpādam api vipratisāro na kartavyaḥ. tat kasya hetoḥ. bodhisattvakoṭyo hy Ajitāśravaṇād eṣām evaṁrūpāṇāṁ dharmaparyāyāṇāṁ vivartante 'nuttarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ. tasmād asya dharmaparyāyasyādhyāśayena śravaṇodgrahaṇadhāraṇārthaṁ, paryavāptaye, vistareṇasaṁprakāśanārthāya bhāvanārthaṁ ca, sumahadvīryam ārabdhavyam.

* 藤田補正表による。

(Sukh. p. 62, *l*. 23—p. 63, *l*. 8)

〔それ故に，そこで，アジタよ，神々を含む世間の前で，あなたたちに告げ，あなたたちに知らせる。この法門を聞くために（śravaṇāya），火の充満した三千大千世界に入っても，越え過ぎて，一念〔というわずかな時間，一たびの心〕[10] の生起でも，後悔してはならない。それは何故であるか。アジタよ，何千万という菩薩たちが，このような法門を聞かないために（aśravaṇād），無上なる正等覚より退転しているからである。それ故に，この法門を深い志向をもって，聞き（śravaṇa），領受し，受持するために，完全に了解するために，詳しく説き明かすために，また修習するために，非常に大きな精進が開始されなければならない。〕

以上で，梵文『無量寿経』における，nāmadheya（名号）を目的語としない一般的な意味の √śru（聞く）の意味・用法を概観してみたのであるが，更に nāmadheya を目的語とする √śru について，考察してみよう。

（2） nāmadheya を目的語とする √śru について

1) sacen me bhagavan bodhiprāptasya, ye sattvā anyeṣu lokadhātuṣv anuttarāyāṁ* samyaksaṁbodhau** cittam utpādya, mama nāmadheyaṁ śrutvā, prasannacittā mām anusmareyus, teṣāṁ ced ahaṁ maraṇakālasamaye pratyupasthite bhikṣusaṁghaparivṛtaḥ puraskṛto na puratas tiṣṭheyaṁ, yad idaṁ: cittāvikṣepatāyai, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim

abhisaṁbudhyeyam.

* 藤田補正表による。

** 藤田補正表による。

(Sukh. p. 13, *l*. 22—p. 14, *l*. 1)

〔世尊よ，たとい私が覚りを得たとしても，もしも もろもろの他の世界における衆生たちが（sattvāḥ），無上なる正等覚に向って心を発起し，わたくしの名号を聞いて（mama nāmadheyaṁ śrutvā），澄浄な心をもってわたくしを随念するとして，もしかれらの臨終の時が到来したときに，〔かれらの〕心が散乱しないために，わたくしが比丘僧伽によってとりまかれ恭敬されて，〔かれらの〕前に立たないようであるならば，その間は，わたくしは無上なる正等覚をさとりません。〕

この個所は，梵文『無量寿経』における第18番目にあげられている本願文である。シナ訳『無量寿経』の第18願と対照すると，著しく相違しているので，刊本で梵文が紹介せられた明治16年以来⑪，いろいろと問題となってきたところであるが，それはそれとして，いまは現に与えられている梵文『無量寿経』そのものにあらわされている説意を見出そうとする，この試みにおいては，そのような問題には立ち入らない。

また梵文『無量寿経』の第18，第19番目の願文には，かつて述べられた如き「写誤」による混乱がある⑫のか，どうか，それもここでは問題とならない。ただ一つ，この梵文『無量寿経』の第18，第19番目の願文には，シナ訳『無量寿経』の第18，第19の両願文の表面には出ていない「衆生たちが，わたくしの名号を聞いて」と衆生の聞名がはっきりと出ている，この一点こそ，見落してはならない，最も注意すべきことであると思う。所で，梵文『無量寿経』における聞名は，先に（c）項（p. 42）で調べたように，

sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti.

〔衆生たちは，かの世尊アミターバ（無量光）如来の名号を聞く。〕

で，要約することができた。それは，

buddhās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ parikīrtayante.

〔諸仏は，かの世尊アミターバ如来の名号を称讃する。〕

とぴったり対応することも，既に述べてきた。しかもシナ訳『無量寿経』のいわゆる第17，第18願成就文に相応する個所（Sukh. p. 41, *l*. 25—p. 42, *l*. 8）によれば，この両者は，

buddhās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ parikīrtayante.
tat kasya hetoḥ.
sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti.

〔諸仏は，かの世尊アミターバ如来の名号を称讃する。
それは何故であるか。
衆生たちが，かの世尊アミターバ如来の名号を聞く〔からである〕。〕

と，「それは何故であるか。」ということばによって，諸仏の称名と衆生の聞名が呼応していることがあらわされている。梵文『無量寿経』における聞名は称名との対応においてあることが知られる。

そして更に，この「衆生たちが，かの世尊アミターバ如来の名号を聞く。」というシナ訳『無量寿経』第18願成就文に相応する梵文の個所には，以下，「聞いて」（śrutvā）どうなるかが述べられている。

śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy adhyāśayena prasādasahagataṁ cittam* utpādayanti, sarve te 'vaivarttikatāyāṁ saṁtiṣṭhante 'nuttarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ.

* 藤田補正表による。
(Sukh. p.42, *l*.6—8)

〔聞いて（śrutvā），たとい一念〔というわずかな時間，一たびの心〕[13] の発起でも，深い志向によって，浄信にともなわれた心を発起するならば，かれらすべては，無上なる正等覚より退転しない状態に安住する〔からである〕。〕

聞いて，信心を発起し不退転に住するといわれているのであるが，「衆生たちが，わたくしの名号を聞いて」云々と，その結果を述べる言い方は，梵文『無量寿経』の47の願文（足利刊本）のうち，第18番目の願文をはじめとして，19，34，35，36，40，42，43 の各願に見え，「名号を聞くと同時に」云々という言い方は，41，44，46，47 の各願にある。

以下その内容を，藤田博士の作成せられた「本願比較対照表」[14] 中のサンスクリット本の項で用いられている願名で一見してみよう。

＜「名号を聞いて」その結果＞

第18番目の願……澄浄念仏
臨終来迎

第19番目の願……善根廻向
十念往生

第34番目の願……得陀羅尼

第35番目の願……捨離女性

第36番目の願……人天所敬

第40番目の願……根力無欲

第42番目の願……生尊貴家

第43番目の願……喜菩薩行

＜「名号を聞く」と同時に＞

第41番目の願……入定見仏

第44番目の願……入定敬仏

第46番目の願……聞名不退

第47番目の願……三忍不退

これによって，「名号を聞いて」または「聞くと同時に」得られる結果をほぼ知ることができるであろう。シナ訳『無量寿経』の第18願成就文に相応する，直前に出した個所は，「名号を聞いて」という表現になっているが，「退転しない状態に安住する」といわれているところからすると，「名号を聞くと同時に」の意に近いように思われる。「名号を聞いて」の場合には，死後どうなるかがいわれているものもあるが，「名号を聞くと同時に」の場合には現生においてどうなるかが願の中心であることが注意せられる。

さて，『無量寿経』に説かれた法門を「聞いた」ならば（śrutvā），「広大なる喜悦（prīti）・歓喜（prāmodya）を得るであろう。」（p. 63, *l.* 22-p. 64, *l.* 1）ということに関しては，前項「（1）nāmadheya を目的語としない √śru について」で取り上げた（pp. 48—51）が，nāmadheya を目的語とする√śru の場合には，どうなっているであろうか。

調べてみると，nāmadheya を目的語とする √śru の場合には，実は，

「聞いたならば」，prīti（喜悦）や prāmodya（歓喜）を得るという表現は，「菩薩の行を喜悦・歓喜する善根に会うこと」（bodhisattvacaryāprītiprāmodyakuśalamūlasamavadhānagatā, p. 20, *ll.* 9-10）とあるもの以外には見られない。そのかわり，「澄浄な心」（prasannacitta, p, 13, *l.* 24），「浄信」（prasāda, p. 18, *l.* 11, p. 42, *l.* 7）ということばが見出される。これは，シナ訳『無量寿経』の「至心信楽」，「歓喜信楽」，「信心歓喜」に相当すると思われ，「心が澄みきって浄らかとなり，静かな喜びや満足の感ぜられる心境を指すのである。」[18] といわれ，「この語には，元来，信の意味は含まれていない。しかるに浄土経典においてはこれをもって信を表わしうると見なしたのである。」[19] といわれているものである。

nāmadheya を目的語としない √śru の場合には，prīti（喜悦）・prāmodya（歓喜）を得るということばであらわされているものが，nāmadheya を目的語とする √śru の場合には，prasannacitta, prasāda を生ずるということばであらわされている。ここに，アミターバ如来の名号を聞けば，prīti（喜悦）や prāmodya（歓喜）ということばであらわされる喜びを得るということより，prasannacitta（至心信楽）や prasāda（歓喜信楽，信心歓喜）ということばであらわされる信を生ずることが強調されているのである。

2) Bhagavān āha: evam evājita, ye te bodhisattvā vicikitsāpatitāḥ kuśalamūlāny avaropayanti, kāṁkṣanti buddhajñānam asamajñānaṁ, kiṁ cāpi te buddhanāmaśravaṇena, tena ca cittaprasādamātreṇātra Sukhāvatyāṁ lokadhātāv upapadyante. na tu khalv aupapādukāḥ padmeṣu paryaṅkaiḥ prādurbhavanti. api tu padmeṣu garbhāvāse prativasanti.

(Sukh. p. 59, *l.* 17—p. 60, *l.* 1)

〔世尊は言われた。

「アジタよ，疑いにおちいって，もろもろの善根を植え，仏の智・等しいも

ののない智（無等等智）を疑う菩薩たちも，まさしくそのようである。かれらは，たとえ仏の名を聞くこと（buddhanāmaśravaṇa）により，またかの心の澄浄（cittaprasāda）だけにより，この極楽世界に生まれるにしても，しかし，化生して，蓮華の中に結跏趺坐して現われるのではなく，蓮華の内奥の住処に住むのである。〕

（藤田試訳　p. 128, *ll.* 1—7 に従う。）

いかなる衆生たちも名号（ここでは仏名（buddhanāman）とある）を聞き，信心を発起し，それだけで極楽に生れることはできる。しかしながら，仏智を疑い，自らをたのんで（善根を植える）聞くことによって，仏法を自己に限定してしまうことを強くいましめられている。

以上，梵文『無量寿経』における √śru の意味・用法を見てきた。この経典に一貫して流れているものは，「聞」と「説」の呼応であり，具体的には，衆生たちは，諸仏がほめて説くアミターバ如来の名号をすなおに聞く。聞いて信心を得，不退転に住することができる。不退転に住した菩薩たちは，完全に了解し，諸仏となることによって，名号をほめ勧めるのである。

次には，梵文『無量寿経』における称名と聞名の開示するものについて私の理解するところを述べてみたい。　（未完）

註（敬称は省略する）

① 『真宗聖教全書，一，三経七祖部』所収（1頁—47頁）の『仏説無量寿経』。

② 前号では，チベット訳，マックス・ミュラー英訳本，これまでのすべての和訳本が支持する「もしも，世尊よ，わたくしが覚りを得たときに」という訳に従ったのであるが，考えるところがあって，今号では，このように「世尊よ，たといわたくしが覚りを得たとしても，もしも……」と訳してみた。従来の訳であらわされている意味と，今試みに訳してみた訳の意味の両者が，願文には含意されていると見られるが，和訳をすれば，どちらか一方の意味しかあらわすことができない。以上のことについては，後に他の論文にて詳しく検討する予定である。

③ nāmadheya について，中村　元博士（『東西文化の交流』161頁）は，「「名号」というと非常にやかましく論議されるが，もとの意味はそんな難しいものではない。その原語は nāmadheya であり，単に「名」「なまえ」というにすぎない。」と述べていられるが，梵文『無量寿経』全体の用法をみると，「諸仏が称讃し，衆生が聞く」名の場合には，特に nāmadheya を使い，単なる名前には，nāman が用いられているように思われる。その中で，今この個所には，nāmadheya が出ているのであるが，『悲華経』(Karuṇā-puṇḍarīkasūtra) の梵蔵漢和「アミダ仏本願文」（宇治谷祐顕教授『悲華経の研究』82頁）によれば，その「無不善名願」は「そこなる衆生に不善の名無けん。」（…… na tatra sattvānāmakuśalasya nāmāpi syāt）とあり，nāman とある。『無量寿経』のこの個所も，もとは nāmadheya ではなく，nāman とあったのではなかろうか。また『無量寿経』の偈文では，アミターバ如来の nāmadheya を nāman という場合(p. 45, *l.* 8, p. 46, *l.* 20)があるが，これは偈文であるからであろう。故に，本稿では，この梵文『無量寿経』においては「諸仏が称讃し，衆生が聞く」名の場合，特に，nāmadheya が用いられているものと見なして，「名号」と訳し，単なる名前は「名」と訳す。『無量寿経』では，アミターバ如来の名号は，伝統的観念をはなれて見ても，「諸仏が称讃し，衆生が聞く」名という特別な意味をもってあらわされているのであると思われる。

④ 「十念」については，シナの善導大師の解釈以後，今日に至るまで（森二郎『無量寿経の原典研究』，薗田香勲『無量寿経諸異本の研究』参照），いろいろな説が出されているが，荻原博士の所説（『荻原雲来文集』279頁—281頁）に従う。それによれば，「citta の念は甚だ短時を詮はす。…… 是の如く梵漢ともに念を以て甚短時の意義を詮はさしむるは，蓋し一の念（かんがえ）あれば必ず若干の時を伴ふ。故に念より時間を分離すべからず。本来の字に短時の義あるに非ざれども，此の不可分離の点より斯く念を以て刹那を詮はすことあるなり。」と述べられ，一念と十念については，「一と十とは計数の基と云ふべし。故に小数の極を其の単位にて示し，十若しくは一と言ひしものなるべし。」（中村元博士（『東西文化の交流』中村元選集 第9巻 161頁）もこの説をとっていられる）と言っていられる。今この個所では，十念の citta（時間）と十心の発起・相続の citta（心）の二つの意味が重ねられていると解し，このように訳してみた。試訳であるので，間違っていれば，訂正したい。

⑤ 註④を参照。

⑥ Sukh. p. 13, *ll.* 22—24, p. 45, *ll.* 7—8。

一三五

⑦ 藤田宏達「*Sukhāvatīvyūha* と Pāli 聖典」（『北海道大学 文学部紀要』十八ノ一 ㉔ 6頁—7頁）参照。

⑧ 同上，17頁。

⑨ 『八千頌般若経』にも，「…… śrutvā codgrahīṣyanti dhārayiṣyanti vācayiṣyanti paryavāpsyanti pravartayiṣyanti」という語句が，くり返し出ているから，これも諸経典に用いられている慣用句の一つであろうが，実際の体験があらわされていることにはかわりないと思う。

⑩ 註④参照。

⑪ *Sukhāvatī-Vyūha, Description of Sukhāvatī, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjio, Oxford, 1883.

⑫ 泉芳璟『梵文無量寿経の研究』（昭和14年2月20日発行による）39頁—53頁。

⑬ 註④参照。

⑭ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』382頁—384頁。

⑮ 同上，591頁。

⑯ 同上。

(49. 5. 20)

〔**付記**〕 梵文『無量寿経』の和訳については，藤田宏達先生の昭和47年度・真宗大谷派安居講本『梵文無量寿経試訳』を参照させていただきましたが，＜従う＞ということわり書きのない場合は私の考えが加えられており，責はすべて筆者たる私にあります。

〔**訂正**〕 前号に発表した「梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）」の一部を，次の如く訂正させていただきます。

p. 2, *l*. 3　インド浄土教⟶インドの浄土思想
p. 2, *l*. 5　〃　⟶　〃
p. 3, *l*. 13　インドの浄土教→　〃
p. 3, *l*. 16　インド浄土教⟶　〃
p. 3, *l*. 18　〃　⟶　〃
p. 4, *l*. 4　〃　⟶　〃
p. 5, *l*. 4　〃　⟶　〃
p. 6, *l*. 7　buddhakṣetreṣu → 削除
p. 8, *l*. 4　インド浄土教⟶インドの浄土思想
p. 8, *ll*. 5-6　〃　⟶　〃

p. 15, *l*. 22　インド仏教・浄土教→インド仏教
p. 17, *l*. 4　tasyāmitābhasya→tasya bhagavato 'mitābhasya
p. 17, *l*. 6　かのアミターバ→かの世尊アミターバ
p. 23, *l*. 20　tasyāmitābhasya→tasya bhagavato 'mitābhasya
p. 23, *l*. 22　かのアミターバ→かの世尊アミターバ
p. 26, *l*. 6　14の如来のもから→14の如来のもとから